

# 中世醍醐寺における他寺僧の受容

藤井雅子

はじめに

右條々、依衆議、所定置如件、  
至徳三年八月廿五日

宗澄判已下  
アリ皆

隆喜

賢盛

阿闍梨 宗覚

(中略)

法印権大僧都 任恵

江戸時代前期に三宝院門跡義演によって記された醍醐寺の寺誌『醍醐寺新要録』(以下『新要録』)の寺法篇には次のような条文がみえる(以下「醍醐寺横入法」)。

## 一 横入禁制事

醍醐寺山下寺僧事、不可入横入之由、先々雖有沙汰、依不記置、動致濫望之條、背寺例歟、自今以後、堅所被停止也、但先々懸寺僧名字、鎌倉住醍醐上綱門弟・東大寺・仁和寺・勸修寺・随心院・安祥寺・大覚寺・石山寺・東寺定額僧・毘沙門谷・賀茂神光院・伊勢棚橋法楽寺・筑前満願寺・八幡五智院等者、任先例、非禁限、縱雖為此衆中、入寺僧之時者、僧名衆中上有披露、可治定也、  
一 新寺僧吹拏之仁、雖為門主并寺僧中、若企奸曲、以他住輩、号此在所之住侶事、為無実者、可罪科事、

冒頭にある「横入」の意味については、『日本国語大辞典』には「横からわつてはいること。途中から加わつてはいること。」とあるが、寺院においては、近年刊行された『寺院法』の注釈に「同一宗派の他寺僧が寺の住僧として入ってくること。」<sup>(1)</sup>「他寺から移つてきて寺僧となること。」<sup>(2)</sup>と記されるように、本稿においても「他寺において出家や修学した僧侶が、別の寺院に移つて寺僧(「交衆」となり、活動すること。」<sup>(3)</sup>と定義しておきたい。なお「交衆」とは「仲間として交わりを持つ集団」との意であり、「寺僧」として活動することを許された僧侶と考えたい。

ところで上記の史料によれば、醍醐寺山下においては基本的には「横入」が禁止されていることがわかる。ただし本寺僧の弟子という立場を持つ「鎌倉住醍醐上綱門弟」や、開祖聖宝の本寺である東大寺、醍醐寺と同じ真言宗寺院の「仁和寺・勸修寺・随心院・安祥寺・大覚寺・石山寺・東寺定額僧」、醍醐寺末寺の「毘沙門谷・賀茂神光院・伊勢棚橋法楽寺・筑紫満願寺・八幡五智院」の僧侶については、予め「寺僧」の「名字」「僧名」を醍醐寺「衆中」に提示すれば「横入」が許可された。また新たに「寺僧」として「吹挙（推挙）」する者は「門主」「寺僧」であろうとも、「他住」の者を上記の「在所」（寺院）の「住侶」であると偽ったならば、「罪科」に処すとした。こうして至徳三年（一三八六）醍醐寺山下衆徒らの連署によって「横入」は明文化されたのである。

「横入」の規制が定められた理由には、醍醐寺において他寺僧による「横入」が行われ、それによりしばしば問題が生じたためであろう。

そこで本稿では、醍醐寺における「横入」にみられるように、他寺僧がどのように受容され、どのような交わりを結んだのかを検証してみたい。

## 第二章 醍醐寺における「横入」と他寺僧による修学活動

「横入」については前掲の『寺院法』にも記されているように、東寺の事例が知られている。例えば「於横入輩者、当寺参住之後、過二夏、可被補云云」<sup>4</sup>「一横入常住寺僧事」などの寺法があり、東寺の場合は「二夏」（二年間）もしくは「十二箇月」など一定期間に問題が無く過ぎれば、「仁和寺・醍醐寺等寺僧」の「横入」を許可した。

これらを踏まえて醍醐寺における横入の例をみていくことにしたい。

『新要録』寺法篇には「横入先例」として、まず「播磨清水寺住」俊恵は、「座主仁王経法之時、召加伴僧」とされ、「横入」し「寺僧」となった例を見る事ができる。また「越前篠尾法師」仲遍は、「正月四日御遷宮」に「出仕」し、その後「三宝院理趣三昧」に「山上分」として「出仕」することになったが、「山下」は「異門不可然」と称したため、「請定」に掲載しないという処置をとった。しかし弘済法印が仲遍を「扶持」することにより、「座主」が受け入れを認めたと記されている。加えて醍醐寺僧が「横入」した事例としては、「醍醐寺常住僧」明海（実運）が一度「他所」勸修寺に「住」したが、その後「還住」し、元海より「座主」を譲与され、補任されたとある。つまり「醍醐寺→他寺→醍醐寺」と移住することも「横入」とされたことがわかる。また後に座主となった「覚洞院僧正」勝賢も、「仁和寺最源法印」の許で「入室得度」した他寺僧であったが、後に醍醐寺へ「移」ってきたという。同じく後に座主を勤めた定済も元は東大寺「東南院」を「本居」としたが、建長年間頃に醍醐寺に「住寺」したと記す。このように座主に昇進した僧侶でさえ、「横入」した事例は決して希有なことではなかった。もちろん醍醐寺における「横入」には、一定の条件が必要とされたものの、容認されていたことが確認される。これらより、修学のための他寺への一時的な住持とは異なり、寺僧として「横入」する必要性は法会への出仕や寺務組織の一員となるためであったとみられる。そして寺内における「横入」僧は、僧侶の人物保証が重視され、師僧による保証もしくは一定年限の住持をもって容認されたのである。

ところで『新要録』寺法篇に取り上げられていない「横入」に相当する事例としては、まず高野山僧であった頼瑜が挙げられよう。頼瑜と醍醐寺との関わりについては永村眞氏による論考があり、以下それに依拠

しながら確認していききたい。頼瑜〔嘉祿二年（一二三二）→正安二年（一三〇四）〕は、高野山大伝法院の僧侶であったが、その後東大寺、興福寺、仁和寺において遊学し、顕教、真言事相の広沢流を相継いで学び、多くの著作を残した。さらに報恩院憲深の弟子となり、小野流の事相を相承したことが知られる。特に頼瑜の場合は、一時的ではあるものの醍醐寺に住持し「交衆」として活動したことが注目される。「真俗雜記問答鈔十」<sup>(8)</sup>には、

#### 四十四 入醍醐交衆事

問、何、答、弘長元年六月十二日午刻、参住醍醐寺報恩寺院、  
同十四日、依僧正御房之仰、入交衆畢、同十五日賜装束、付衣生  
絹五帖袈裟、大帷并小帷賜之、同十七日御遷宮、出仕勤之、  
同二十三日被成補有職畢、生年三十六也、

とみえ、弘長元年（一二六二）六月十二日に醍醐寺報恩院に「参住」し、十四日に憲深の「仰」せにより「交衆」となり、十五日に「装束」を「賜」り、十七日に清瀧宮遷宮法会に「出仕」し、「有職」に補任されたとする。「有職」補任については『新要録』に「頼瑜甲斐 貞弘、寺務之時補、弘長元六廿三、高野法師」とあり、頼瑜が「高野法師」でありながら、「甲斐」「甲斐法印」と称され「有職」に加えられたことがわかる（『新要録』報恩院篇）。頼瑜が「交衆」となるに当たり、師で当時「座主」であった憲深から「装束」を与えられたという行為がすなわち寺僧として承認されたことを意味すると考えられる。こうして寺僧であるとともに、憲深の弟子となった頼瑜は憲深から三宝院流報恩院方を学び、「薄草子口決」を草した。この後頼瑜は一旦高野山に帰寺するものの、文永四年（一二六七）再び醍醐寺に戻り、憲深の弟子実深から醍醐寺内に「中性院」という院家を与えられ住持した（『真俗雜記問答抄』十七本）。

しかし再度高野山に戻り、後の根来寺に大伝法院を移して、その発展に努めた。<sup>(9)</sup> 頼瑜が報恩院で相承した法流は中性院流として、その後根来寺中性院において相伝された（『密教伝来三國祖師血脈鈔』）。

以上が本稿冒頭の「醍醐寺横入法」制定以前の先例であるが、その後も「横入」はしばしば確認される。室町中期頃より、報恩院や無量寿院院主を勤めた醍醐寺僧は相継いで地方に下向し地方住僧らに「印可」授与等を行ったが、<sup>(10)</sup> 地方住僧の中にはさらに深密な伝授を求め、醍醐寺に登山し住持する者もみられた。例えば天文元年（一五三二）十二月には下野国慈心院俊済が「山上交衆」に加えられたが、これについて「於当寺押入始例歟」と記される（『嚴助往年記』同月廿三日条）。ここにみえる「押入」は「横入」と同様の意と考えられ、地方住僧による「横入」の初例として掲げられる。

ところでこうした代々の報恩院や無量寿院院主と他寺僧である地方住僧との関わりについては論じられてきたが、地方住僧らによる醍醐寺への「横入」についてはほとんど注目されていないように思える。そこで章を改めて地方住僧による「横入」の問題を考えてみたい。

## 第二章 醍醐寺理性院と信濃国文永寺僧

醍醐寺における地方住僧による「横入」は、「醍醐寺横入法」にもみられるように醍醐寺諸院家と本末関係にあった地方末寺の住僧が許可されたと考えられる。そうした中で「交衆」としての具体的な活動を知ることができなのが信濃国文永寺僧である。文永寺は信濃国伊那郡南原にあり、現在は真言宗智山派に所属するが、室町中期より江戸時代に至るまで醍醐寺理性院の末寺であった。<sup>(11)</sup> 文永寺に関する先行研究としては、

『文永寺史』<sup>13)</sup>、市村威人氏による「文永寺の女房奉書」<sup>14)</sup>があるが、これらは、武田氏・織田氏による再興など世俗社会との関わりの説明が主である。また井原今朝男氏による「民衆統合儀礼としての太元帥法」<sup>15)</sup>は、国家大法である太元帥法が「鄙」の理性院末寺である文永寺において行われた可能性を述べたものである。

そこでこれらの先行研究に依りながら、まず文永寺について概観しておきたい。「文永寺略縁起」によれば、文永寺は文永年間頃、僧隆毫が南原の地に草庵を結んで顕密の法を修めていたことが亀山上皇の天聴に達したため、隆毫を開山とし草創して、年号を賜って寺号としたとされる。一方で「文永寺開起之由来」によれば、弘長年間（一二六一～六四）に伊那郡に悪疫が流行したため、領主が神峯の地頭知久左衛門五郎信貞を通じて鎌倉幕府に訴えたところ、亀山天皇から太元明王の尊像を賜り、醍醐寺理性院の弟子となつて、一字を建立するように勅命が知久氏に下った。これにより文永元年（一二六四）、知久氏によつて文永寺が創立されて、理性院の弟子隆亮を開山とした。さらに亀山天皇は永く文永寺を朝廷の勅願所と定めて寺領を寄進し、十二坊を建てるようにと勅定したという。いずれの史料も後世の史料であり、伝承の域を出ないが、室町時代の住持に知久氏の出身がみえること、知久氏が再建にも深く関わっている点から、少なくとも知久氏がその草創に関わっていた可能性は高いといえよう。文永寺の代々住持については「文永寺祖師系図」<sup>16)</sup>に、

隆毫 天台宗阿闍梨——定成 天台宗僧都——行伝 同——頼舜 真言宗僧都、高野方、俗知久種久息——頼椿 同  
——宗詢 勅号密乗院、中務法印、真言宗理流、知久大皇子——仙燿 竹恵院、右兵衛督法印、同、巨岳子——宗顯  
右衛門督律師、同、元中子——宗信 民部卿兼少僧都、同、号西林院、易先子——宗然 醍醐理流、善賢院法印、安房守子

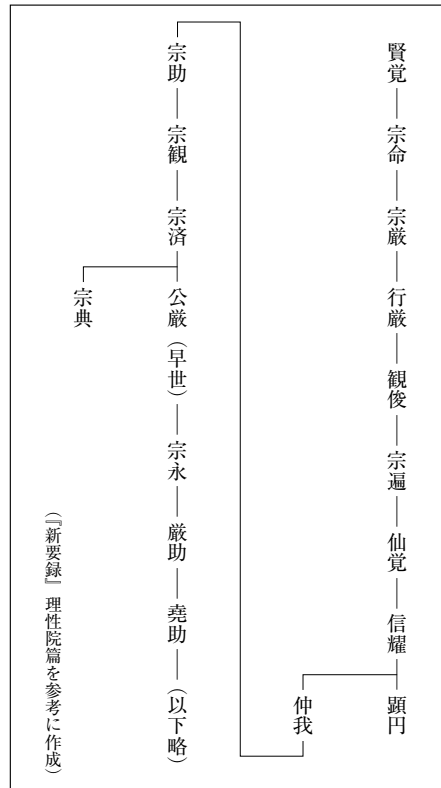
とあり、室町中期の宗詢以降の住持は醍醐寺理性院に入室し、修学活動

をしていたことが、「嚴助往年記」などからも確認できる。そこで宗詢を中心に理性院との関わりおよび醍醐寺での活動について注目したい。

理性院は永久三年（一一一五）三宝院祖師勝覚の弟子賢覚（承暦四年（一〇八〇）～保元元年（一一五六））が、父賢円（の住坊を理性院と号したことに始まる（『新要録』理性院篇）<sup>17)</sup>。理性院を本拠とした理性院流は賢覚を祖とする法流である。勝覚は多くの弟子を持ったが、そのうち定海は三宝院流、賢覚は理性院流、聖賢は金剛王院流を創始し、後世、これらは「醍醐三流」と呼ばれ、醍醐寺のみならず真言密教小野流における中核的な法流とされた（『弘鑊口説』）。また理性院流は、毎年正月八日より十四日まで鎮護国家のために行われる太元帥法を平安院政期頃より相伝し、その院主らが代々勤修した。<sup>18)</sup>

理性院の院務および法流相伝次第については〔図1〕、室町時代における院主の出自や生没については〔表1〕の通りであるが、南北朝期に顕円が南朝に与したために一旦理性院は闕所となり、文和二年（一三五三）五月、後光厳上皇天皇綸旨により三宝院門跡賢俊に理性院「管領」が認められた（『新要録』理性院篇）。その後、三宝院門跡により、宗助が理性院院主に任じられ、代々の院主は三宝院門跡に従った（同前）。そして寺務を補佐する「寺務代」としての役割を代々の院主は担った（同前）。

〔図1〕 理性院院務・法流相伝次第



しかし応仁文明の乱下の文明二年（一四七〇）八月、醍醐寺の山下伽藍の多くは兵火を受け、理性院も焼失したことが次の史料から確認される（『新要録』釈迦堂篇、傍線は報告者が付した）。

賢深記云、文明貳年八月十九日勸修寺ノ城破、武田方軍勢打死了、翌日廿日当所ニ押入、寺中ニハ、金堂・三昧堂・清涼堂・御影堂・清瀧宮・同拝殿（中略）金剛輪院ヲ始テ金剛王院・報恩院・理性院・地藏院（中略）諸坊無残、一時ニ灰燼ト成了、こうした中で宗済から嚴助に至る理性院の院主や正嫡の相承は混乱したとみられる。加えて、次期正嫡に予定されていた公厳は文明十三年（一四八一）に早世したため、正嫡の中継ぎとして、平民である宗典が登場することとなった。

宗典（応永三十三年（一四二六）～永正十四年（一五一七））は、永享八年（一四三六）に醍醐寺に入室し、同十年出家した。文明十三年（一

〔表1〕 室町時代における理性院流血脈次第

法名	出自	生没年	伝授年月日	伝授内容	師
宗助	中御門（松木）権中納言冬定息	正平2（1347）～応永25（1418）	延文4（1359）12月8日	灌頂	加行は賢俊、灌頂は仲我
宗観	中御門（松木）権中納言宗泰息	永和元（1375）～文安4（1447）	応永4（1397）7月4日	庭儀	宗助
宗済	中御門（松木）中納言宗量息	応永5（1405）～寛正4（1463）	正長元（1428）4月14日	入壇（伝法灌頂）	宗観
公厳	西園寺太政大臣公名	文安元（1444）～文明13（1481）			（宗済カ）
宗典	（不明）	応永33（1426）～永正14（1517）	文安5（1448）12月5日	（灌頂）	宗済
宗永	中御門（松木）中納言宗綱息	応仁元（1467）～天文14（1545）	長享2（1488）12月13日	（灌頂）	宗典
嚴助	中御門（松木）中納言宗綱息	明応5（1494）～永正10（1567）	永正14（1517）	（灌頂）	宗永

〔註〕「理性院流血脈次第」（『醍醐』83函23号）、「理性院法流門跡相承系図」（『醍醐』83函25号）、「理性院院主次第」（『醍醐』83函64号）等を参考に作成。

四八一）、師である公厳が入寂したため、その後七年間、若年の院主宗永に代わり、太元帥法などの祈禱を手代として行った（『宗典僧正記』<sup>19</sup>）。また『新要録』理性院篇の「血脈事」においては、「宗済—宗典—宗永」と釣線で結ばれ、宗典の項に「宗典五智院権僧正、元ハ普賢院也、<sup>20</sup>理性院出世ノ者也、初法流預」と記されている。これによれば宗典は醍醐寺内の五智院（元の普賢院）に住持していたこと、理性院院主の「出世者」であったことがわかる。「出世者」という語句については、院主や門跡などを「出世」させる立場、すなわち修学活動の上で深く関わり、時として扶持するような立場であったと考えたい。<sup>20</sup> また「初法流預」とは、表向きは正嫡に値しない立場だが、法流の断絶を避けるため、一時的に法流を預り中継する者を言う。理性院の代々の院主兼正嫡は多くの場合、〔表1〕の通り松木家などの堂上家以上の家門から輩出されていたのに比して、<sup>21</sup>宗典は出自の身分が低かったため、院主ではなく、敢えて「法流預」と称されたと推測される。なお宗典の出自は今のところ明らかではないが、「平民」の出であった可能性が高いと考えられる。<sup>22</sup>

文明十三年、宗典は死の直前の院主公厳より「一流相統以後、一流之正教、可及披覽之事、可存知之由」を伝えられ、正嫡に相承されるはずの理性院流嫡流を相伝した（『醍醐寺文書聖教』以下『醍醐』八一函九二号）。そして次期院主である公厳に、嫡流を相承する役割を担うこととなった。しかしすでに公厳の入滅時五十六歳であった宗典は、自身の「余命」や「万一」を恐れて（同前）、自身が公厳から引き継いだ嫡流を何れかに託しておきたかったようである。その対象となったのが、醍醐寺に住持し修行を行っていた文永寺僧宗詢であった。

ところで宗典のような立場や役割は特異なものであろうか。実は室町中期から後期における醍醐寺は前述したように、山下の多くの伽藍が焼失し荒廃していたため、多くの僧侶は被害の少なかった山上の院家において活動していたとみられる。ただし山上は山下に比して出自の低い僧侶が住持する傾向にあったとみられ、また応仁文明の乱によって多くの貴族が京都を離れて地方に下向した事情もあり、この時期の醍醐寺諸院家への貴種の入室は減少した。その代わりに嫡流の断絶を防いだのが、「平民」出身の「法流預」であった。例えば醍醐寺報恩院の院主次第にも「平民初法流預」と称される澄恵や「当流預」である深応の存在が書きつけられている（『新要録』報恩院篇）。そして彼らは、自ら地方に下り、地方住僧らに対して授法を行い、法流の拡大を目指した。「平民」の付法活動が、それまでの貴種らによる院家の経営に新たな展開をもたらしたといえよう。

以上のような文永寺と理性院との基礎的情報を踏まえた上で、文永寺僧宗詢による醍醐寺および理性院への受容についてみていきたい。宗詢は幼名を宮寿丸といい、康正元年（一四五五）七月・十月、後花園天皇の召しにより参内し、童形にて和歌を詠んだ後、醍醐寺に入り出家した

（青蓮院殿御筆和歌「文永寺文書」、『信濃史料』）。文正元年（一四六六）・応仁元年（一四六七）正月、理性院において太元帥法があり、宗詢も伴僧に列しており（柳原家記録百九）、ここに醍醐寺の寺僧としての活動が確認できる。文明四年（一四七二）八月、宗詢は醍醐寺において宗典より法流の伝授を受けたが、この伝授について宗典は宗詢に対して「唯授一人之様ニ可被思食候」と述べていることが注目される<sup>23)</sup>。公厳八滅後の文明十四年（一四八二）九月には宗典が文永寺に下向し、宗詢に対して「法流之事」（理性院流の嫡流・正嫡）を「申置」いた。さらに宗典に「万一」のことがあれば、「院家之聖教」（理性院の聖教）を「代々祖師之先規」に「任」せて「披覽」を「免許」し、「院中之儀」についても「真俗」にわたり宗詢の「御指南」を「加」えることを恃んでいる<sup>24)</sup>。明応九年（一五〇〇）六月、宗典は宗詢に対して理性院流を「一事不残」らず「申置」く上は、「正教等二流之分」の「御披見」を許す旨を伝えた<sup>25)</sup>。上記の三度にわたる伝授やそれを証した文書から、宗典は宗詢を次期理性院院主宗永への中継的な役割を果たす存在として保持しようとしていたと考えられる<sup>26)</sup>。

宗詢が宗典から嫡流を相承されたことについては、これに先立つ応仁二年（一四六八）に宗詢が理性院宗典より伝授された「牛黄加持秘決」（牛玉根本印明）「牛玉加持作法」を併記の奥書からも知られる（『醍醐』八二函五五号）。

門流相承為深秘事、可秘之、右、牛黄加持之間事、以口伝授之、今記与被見之、更以無所違矣、沙門行嚴

御本云

嘉暦貳年二月七月書写之、金剛仏子光助

牛黄加持秘決者、門流之正棟所伝持也、仍授与光助阿闍梨畢、法印信耀（中略）

御本云、応仁貳年五月八日授与宗詢阿闍梨畢、權少僧都宗典判

明応八年己未三年廿六日、依五智院法印御房之仰、以彼御授与之本

書写之、進之者也、宗詢五十九

つまり宗詢は「門流相承」の「深秘」であり「正統」（正嫡）が所持する「牛黄加持秘決」を伝授され書写している。また宗詢は理性院流に相承される太元帥法についても宗典からの伝授を受け、聞書を作成している（『宗詢問書太元雜記』『醍醐』一四〇函三号）。

以上より宗詢は理性院の末寺僧でありながら、本来、理性院の正嫡が相承される秘事を伝授したのである。これは宗典に「万一」があった場合に備えての伝授であつた。しかし宗典は長命を得て、長享二年（一四八八）次期院主である宗永に対して無事に伝法灌頂を始めとする「法流」を伝授した。よつて結果的には、宗詢の出番はなかったが、地方寺院で末寺である文永寺僧が本寺理性院への正嫡問題に一時的にでも関与する立場にあつたことは注目されよう。

では宗詢以降の文永寺僧は醍醐寺や理性院においてどのような活動をしていたのであろうか。文永寺宗信は永正十八年（一五二一）十月六日、「信州竹園院」とともに上洛し、十五歳で醍醐寺において得度したが、その後信州に帰国し十五年間を過ごした（『醍醐』六七函四八号、「厳助往年記」）。天文十二年（一五四三）宗信は再び醍醐寺に登山し、九月醍醐寺内に「院家居住部屋」を造り、同十二月廿八日に「山上交衆」に入つたとされることから、醍醐寺への「横入」が確認される。なお宗信は天文十二年から十八年まで理性院における太元帥法に出仕し、同十四年には「神供役」を勤仕している（『厳助往年記』）。

ところで基本的に寺内の法会に出仕する場合は「寺僧」であることが条件となつていたことは冒頭で触れた通りである。そこで理性院は宗信

の出仕以前に、宗信が「寺僧」であることを証する「注文」を寺家に提出した。しかし当時の醍醐寺には下記のような法度が存在した（『醍醐』六七函四八号）。

当寺々僧法度事

当寺々僧在国事、五ヶ年之内、雖為在国、猶常住タリ、三ヶ年ヲ過レハ兼寺僧也、上洛之後七年令寺住已後、又如元常住寺僧也、兼寺僧、寺役等之出仕雖有之之、供料以下支配無之云々、

本書を書写した光台院權僧正亮淳は、こうした「寺僧」「交衆」を規定するこの「法度」を掲げた後、宗信が「伴僧」に加えられたのは「廿五ヶ年在国ナレドモ令人數畢」と記し、異例なことであつたと評している。

このように「横入」をして「寺僧」「交衆」に関する規定は、中世後期において具体的に明文化されたが、それが必ずしも遵守されたかは微妙であるといえよう。「注文」を提出した理性院が室町時代において代々「寺務代」を勤める立場にあつたことも、「法度」が無視された理由として考えられよう。また文永寺も理性院にとつて重要な末寺であり、その僧侶である宗信の処遇も等閑に出来なかつたこともその要因かもしれない。

以上、本章では理性院の末寺である文永寺僧宗詢と宗信の事例から、理性院における活動をみてきた。宗詢は宗典から「法流」を伝授されるなど、相承において重要な役割を与えられた。宗信は醍醐寺に居住する「寺僧」となり、太元帥法に伴僧として出仕したことが確認された。こうした中世醍醐寺における末寺僧の受容は、近世における本末関係にさかのぼる重要な関係として注目されるべきであろう。

### 第三章 醍醐寺理性院と泉涌寺僧長典

前章では、理性院における末寺文永寺僧の受容をみてきたが、その他に理性院と密接な関わりをもった他寺僧としては、泉涌寺僧の長典が挙げられる。

長典については、まず大谷由香氏が智積院所蔵の『視覃雜記』の作者として注目された。当史料は十五～十六世紀初頭における泉涌寺教団の規律、末寺の状況、教団の実態を語る重要な史料であるが、その記者である長典についても本史料の記述から解明しておられる。これによれば、長典は長享元年（一四八七）十三歳の時に悲田院で泉涌寺第四十八世長老春嶽全長から沙弥戒を受けて「実名」である「長典」を、その後同第四十七世性堂教見から具足戒を受け、第五十一世雄峯聖英から「文光」という「道号」を賜って、第五十三世先白善叙を師とする「泉涌寺の系統を引く律僧」であるとした。さらに長典は泉涌寺開山俊仍よりの由来を有する「泉涌寺開山一夜大事」を相承したが、この「大事」は台密の穴太流と東密の西院流の含み込んだものであり、長典は密教行者でもあったと述べている。さらに「念仏の行者」であり、長典は泉涌寺末寺の長福寺の住僧であったとする。<sup>(28)</sup>

この研究を踏まえて、西谷功氏は現存最古の写本奥書を持つ醍醐寺本『十巻抄』の奥書にみえる「仏子長典」が、『視覃雜記』の作者である長福寺長典と同一人物と判断された。そして『醍醐寺文書聖教』にみえる長典関係の史料を分析し、長典が醍醐寺五智院宗典の弟子として真言密教小野流の理性院流・三宝院流を伝受したとし、「律を基本として諸経義を兼学」する僧侶であったと言及しておられる。<sup>(29)</sup>

これらの先行研究によれば、長典は文明七年（一四七五）の生まれであり、泉涌寺長老から受戒を受けて師としたことから、長典の本寺は泉涌寺であったといえよう。また長典が「兼学」僧であったことはすでに指摘されているが、いまだ醍醐寺における修学の実態については解明の余地が残されていると思われる。そこで本稿では、他寺僧である長典が、醍醐寺内でどのような修学活動をしたのかについて明かにしていくことにしたい。

#### （一）室町後期における理性院と泉涌寺

長典が関わりを持った理性院僧は宗典と厳助である。宗典については第二章で取り上げたため、ここでは厳助について簡単に確認しておきたい。

厳助（明応三年（一四九四）～永禄十年（一五六七））は松木宗綱息で、永正六年（一五〇九）四月に実兄で理性院院主であった宗永の許に入室得度し、永正十四年（一五一七）三月十六日に宗永から伝法灌頂を受けた（『醍醐』一三九函六号）<sup>(30)</sup>。大永六年（一五二六）七月には宗永より理性院を譲与され、理性院第十八代院主となった（『醍醐』五函四七号）。また宗永が院主を兼帯した醍醐寺妙法院についても厳助が相続したとみられる。<sup>(31)</sup>

厳助は明応三年から永禄六年（一五六三）に至るまでの年代記を残している。これは『厳助往年記』と呼ばれ、寺院内の記事のみならず、室町後期における公武の状況や当時の社会情勢についても書き及んでいるため、中世末期を知る上での重要な史料として広く活用されてきた。しかし一方で厳助の僧侶としての活動については、これまでほとんど注目



されてきていない。今回、長典と厳助との関わりを明らかにすることにより、僧侶としての厳助の活動、特に理性院院主としての姿もみえてくることになる。

ところで宗典は長典との関わりを持つ以前より、長典の本寺である泉涌寺僧と関わりを持ったことが「宗典僧正記」から知られる。まず明応三年（一四九四）六月廿一日条には、宗典が泉涌寺において「求聞持」を始行し百日間行ったと記されるが、この記事には「泉涌寺ノ衆灌頂十ヶ年ニ成候」と付記されている。これにより、泉涌寺僧への「灌頂」がこれに先立つ十年以前より行われており、醍醐寺もしくは理性院と泉涌寺との関わりはかなり以前より存在していたことが確認できよう。また永正十一年（一五一四）十二月十三日条にも、泉涌寺において灌頂があったことが記されている。

泉涌寺は真言宗寺院であるが、律宗も伝持する寺院であった。しかし醍醐寺同様に泉涌寺も応仁文明の乱以後幾度となく炎上した。こうした状況により、長典も本寺泉涌寺ではなく、様々な寺院を転々としていたとも考えられる。西谷氏による『醍醐寺文書聖教』の分析によれば、長典は山城国「久世白河別墅本堂」、近江国「高嶋郡松蓋寺」、山城国五辻山長福寺、観音寺（北野神宮寺内）、長泊寺（近江カ）、「堺南庄正法寺」などに住持していることが確認され、「拠点の醍醐寺を中心に、現在の滋賀県西部から京都府南部一帯を活動圏としていた」ことが明らかにされている。<sup>(33)</sup>

以上、室町後期における理性院と泉涌寺はいずれも荒廃している状況だったこともあり、灌頂や付法において補完関係にあったとみられる。こうした背景があったために、泉涌寺で学んだ長典が理性院を窓口として醍醐寺に受容されたのであろう。そこで次に長典による醍醐寺にお

る活動を検証し、如何に長典が醍醐寺内において受容されたのかを明らかにしてみたい。

## （二）醍醐寺における長典の活動

まず長典と宗典との関わりについて取り上げたい。両者の関係は宗典が師で、長典がその弟子であり、『醍醐寺文書聖教』には長典が宗典から伝受された聖教が数多く残されている。これらの主なものについてはすでに西谷氏によって紹介されているため、ここではその内のいくつかを挙げるに留めたい。

明応七年（一四九八）九月一七日には、東寺宝生院において宗典から長典に対して妙見法次第が伝受された。そして閏十月廿八日、長福寺において長典はこれを書写している（三六八函三二）。文龜三年（一五〇三）四月四日には、東寺において宗典から長典に大勝金剛護摩法が「伝受」され、長典は宗典の「御本」を「申出」て書写した（『醍醐』四七三函一五四号）。いずれも伝受の場合は東寺であるが、これは宗典が東寺五智院の院主を兼帯していたことによる。<sup>(34)</sup> また永正十四年（一五二七）結縁灌頂三昧耶界作法の奥書には「醍醐五智院権僧正宗典譲与之給者也、弟子長典」とあり、両者の師資関係が明記されている（『醍醐』二〇四函三四号）<sup>(35)</sup>。

では長典は宗典から、どのような内容を伝受したのであろうか。「理性院流聞書」（『史料1』）は長典筆と推測されるもので、袋綴装で一四〇紙にわたって書かれている大部な聖教である（『醍醐』三三〇函四五号）。その内題には「理性院流聞書 末資長典記之」と書かれており、文中に「永正元年十月十三日」の年月日が見えることから、永正元年（一



【史料1】理性院流問書

五〇四）の前後に作成されたものと考えられる。文首には「問、五身法印明三寶院流有相違哉事」とあることから、本書が理性院流に限らず、三寶院流など醍醐寺に伝わる法流の由来、作法などに関わる秘事等を、弟子長典が師宗典から聞き、その内容を問答形式で書き表したものであることができる。宗典は理性院流のみならず、三寶院流にも通じており、永正十一年（一五一四）六月には外題「三寶院流事」とある聖教を長典に相伝していることもあり（『醍醐』四七五函五五号）、長典の問いに答えることが出来たのであろう。

同名の聖教である「理性院流問書」は端裏に「理性院流問書 長典問宗典答」とあり、その内容は結縁灌頂の道場図を含む道場図である（同三四四函八号二番）。先の聖教と同様、長典の「問」うたことに対して宗典が「答」

えたという問書である。

「曼荼羅供作法」は、外題に「曼荼羅供作法 理性院 長典」とあり、奥書に「永正十三年 丙子 年十月廿九日尾宿火曜丁丑日、賜五智院権僧正御本書了、長典<sup>法生四十二</sup>とみえる（同四一二函一二二号二番）。本書は曼荼羅供養のための作法であり、永正十三年（一五一七）に、長典が宗典より伝受して書写したものである。また「太元法略次第」には奥書はないものの、表紙に「長典」の名前が記されており、長典の書写もしくは所持本であったといえる（同三一七函七三三）。前述したように、太元帥法は理性院流に相伝される秘法であり、本書はその太元帥法の次第本である。他寺僧である長典に対して、理性院流にとつての独自性を表す太元帥法が伝授されたことは注目されよう。

このように長典に関する聖教は上記のような自筆書写本を含めて『醍醐寺文書聖教』中に約百点確認される。これほどまで多くの聖教が醍醐寺に残されたということは、長典が一時的にしても醍醐寺内に住持していたと考えられよう。では長典は醍醐寺内の何処に所属して、修学活動を行っていたのであろうか。以下、『醍醐寺文書聖教』を基に、長典の所属を年代順に追っていくことにしたい。その方法としては、奥書などにみえる法名の前に冠される院家名などを参考にしていく。

永正六年（一五〇六）正月には「清瀧末資長典」（仁王般若大秘法護摩表白『醍醐』二五五函二六号）、天文二年（一五三三）十月には「清瀧末流長典<sup>法生五十九</sup>」（真言等読誦次第『醍醐』五三六函八九号）とみえる。同じく「真言等伝授次第」（同五三六函八九号）にも、天文二年（一五三三）に「清瀧末流長典」が書写した奥書がある。

「清瀧宮」（清瀧宮）は醍醐寺の鎮守社であり、山上山下に各々存在するが、第二章で引用した『新要録』の記事の通り、清瀧宮は文明二年

(一四七〇) 八月に応仁文明の乱の兵火により焼失し、その後、再興されたのは永正十四年(一五一八)四月棟上が行われて以降であった(『新要録』清瀧宮篇)。よって長典はそれ以前の永正六年に「清瀧末資」と名乗っていることから、上醍醐寺の清瀧宮に住持した可能性が高いのではなからうか。前述したように、下醍醐寺より、上醍醐の方が「横入」に対して寛容であり、他寺僧に対する受容が多くみられることから、上醍醐寺の清瀧宮に所属していたのではないかと考えられる。

ところが天文四年(一五三五)年になると、長典は「玉生院長典」と称している(散念誦、『醍醐』二九七函二五二号三番)。「太元護符」(『醍醐』五四三函一五六号)の書写奥書には、

右、理性院前院主宝光院前大僧正宗永賜御本、城州綴喜郡田原南上三河守持山寺一夏安居前三月時、為令法久住・利益無辺、書写畢、

天文四年未乙四月大廿三癸丑日申尅、長典生六十玉生院、

得理性院主嚴助僧正尊命、号玉生、其意者玉者理之篇、生者性之作也、依法流之執心如此、奉頼清瀧両所権現冥助者也、

とみえる。長典が「玉生院」を号する理由とは、「理性院院主」の嚴助の「尊命」を「得」たことによると主張している。そして「玉」は「理」を、「生」は「性」を「作」るものであり、「法流之執心」によりこのように許可され、これらは「清瀧両所権現」つまり山上山下清瀧権現の「冥助」(御加護)をよすがとするものと説く。繰り返しになるが、長典は「理性院」に所属する僧侶であることを理性院院主嚴助から認められたことがわかる。

以上より嚴助は天文三年以前は「清瀧末資」と称し、清瀧宮に所属していたが、同四年以降は「理性院」に所属する僧侶と名乗ることを理性院院主嚴助によって許可されていることがわかる。その画期は如何なる

傳法灌頂阿闍梨職位事

昔大日如來開大慈胎藏金剛秘密部中會授金剛灌頂金剛薩怛數百威之後龍極喜薩如是傳金剛秘密之近近吾祖所根本文可闍梨弘法大師既入幕高令至愚身第三十四代文悲胎藏三十三華傳授次第所宜無相承顯宗僧數年之間盡求法藏幸先師五智院權僧正宣惠許可密印爰據僧正嚴助深聲三密與金尊學而計大法金尊相權已既授傳法許可三密印也為後嗣梨為後招而授之能流五臺之源可期八葉之連是則彌佛恩慈師德垂頌如如不可餘念耳

天正三年九月二日銘日學前權僧正嚴助大智院

轉授長閑寺大僧長典

要因によるものなのであろうか。

実は天文三年九月二日、長典は嚴助に対して許可灌頂を行っており、そのことが画期となったと考えられる。その印信が残されているため、写真とその中の一文を引用すると(長典授嚴助許可灌頂印信紹文案、『醍醐』七九函一四八号、【史料2】<sup>36</sup>)、

【史料2】長典授嚴助許可灌頂印信紹文案

小僧<sup>(長壽)</sup>數年之間、尽求法、誠幸先師五智院權僧正宗典蒙許可密印、爰權僧正嚴助深尋三密奧旨、專學兩部大法、今機緣相催、已所授伝法許可之密印也、

とあり、宗典から伝授した「許可密印」を嚴助に授与したことがわかる。周知の通り、許可灌頂とは師資の關係を結ぶ儀式であることから、長典と嚴助は師と弟子との關係を結んだことが確認される。

ではその伝授内容について検証してみたい。同日に長典が伝授したことを書きつけた「印可記」によれば、「天文三年九月二日<sup>(領曜)</sup>、於上醍醐密教院、三寶院方許可受之、師主 比丘長典<sup>(長壽寺住持)</sup>とあり、その道場には祖師の御影が莊嚴されたことが「祖師 四幅懸之、大師<sup>(空海)</sup> 尊師<sup>(聖宝)</sup> 定海 宗典也」と記されている(『醍醐』二五一函一四一号)。つまり長典が嚴助に伝授したのは祖師像から察するに、理性院流ではなく、宗典を経由して相承された三寶院流であったとみられる。また同日には、長典は嚴助に対して「第二重大事」も伝授している(『醍醐』七一四号一〇〇号)。

以上から長典が院主嚴助に対して伝授した内容は三寶院流の秘事であった。理性院院主である嚴助にとって三寶院流の伝授は必要であったのか。この要因については南北朝時代に賢俊によって理性院院主に据えられた宗助について、賢俊が記した一文が指し示している(『前大僧正賢俊自筆置文』『醍醐』二〇函四七号・一〇四函一号)。

#### 一 宗助僧都事

理性院為闕所、拝領了、而以此仁為院務沙汰付、已經多年了、定不忘此志歟、随而如加行、先知当流云々、但先可知彼自流、自然遂重受、可憑申本院家、殊又可被加扶持者也、

もともと宗助は理性院住僧ではなかったようであり、賢俊より「院務(院主)」を命じられたことにより、賢俊から三寶院流の「加行」を受け、

三寶院流を学ぶことを申し出た。しかし賢俊は先ずは「自流」である理性院流を学ぶことを命じた。つまり宗助は賢俊から三寶院流の伝授を望んでいたとみられる。その後、宗助が三寶院流を伝授したのかは不明であるが、三寶院門跡に「扶持」される門徒として、三寶院流を相承していた可能性は、大いに考えられる。こうした由来により、代々の理性院院主は三寶院流の相承を重視したのではないかと推測される。

以上から宗典から長典、長典から理性院院主嚴助へと秘事が継承されたことはまちがいない。長典は他寺僧でありながら、理性院院主嚴助に対して法流相承の中継役という役割を果たしたことは注目されよう。そしてそれは嚴助にとって不可欠な伝授であったことは、長典が理性院院主嚴助が長典に対して「法流之執心」を根拠として「理性院」と「号」すことを認めたことが証明している。こうした働きにより、他寺僧である長典は醍醐寺内に所属する僧侶となることができたといえる。しかし現存する「嚴助往年記」中の長典關係の記事は、天文八年(一五三九)九月廿八日条の「長福寺長典於江州高嶋阿弥陀寺<sup>⑦</sup>円寂云々」のみである。師の入滅を記す内容としては、あまりに素っ気ない記述であるように思える。またその所属についても醍醐寺僧ではなく「長福寺長典」として記している。長典はこの時すでに醍醐寺を離れていたこともあり、その所属は解かれていたようである。いうまでもなく他寺僧が醍醐寺僧として認可されるのは醍醐寺内に住持している間のみだったといえよう。

#### おわりに

本稿は醍醐寺における他寺僧の「横入」「押入」「交衆」の事例を通して、中世において他寺僧が如何に受容され、活動したのかを明かにしよう

うとしたものである。特にその事例として、第二章と第三章では理性院を取り上げた。室町中期から後期における理性院やその院主の相伝についてはこれまでほとんど注目されることがなかったが、応仁文明の乱の兵火による焼失が影響して、理性院の院主の相伝も混乱していた。そうした中で本稿で取り上げた五智院宗典は、嫡流である理性院流を断絶することなく相伝させた重要な人物であったことは間違いない。そして第二章で取り上げた通り、宗典は自身の「万一」により「法流」が断絶する危険に備えて、文永寺僧宗詢への伝授を行ったのであろう。末寺僧である宗詢に相承した意図は、主に「器用」によるものと考えられる。結果的には宗詢の活躍する場面は訪れなかったが、末寺僧にこうした重要な役割が与えられたことは注目すべきであり、醍醐寺における他寺僧の受容の一端とみることができよう。

また第三章では、泉涌寺を本寺とする長典について取り上げたが、長典は宗典から様々な伝授を受け、多くの聖教を醍醐寺に残した。そして院主厳助に対して、宗典から相承した三宝院流の秘事を中継する役割を担った。つまり長典は醍醐寺に一時的に住持して修学したということで片付けられない、特別な役割を果たしたのであり、ここに他寺僧と醍醐寺との密接な関わりがみえてこよう。

なお文永寺僧宗詢や泉涌寺僧長典が理性院流嫡流の相承に関わったことは、「理性院流血脈私拔書」に両者が掲げられていることから明かである（『醍醐』八三函五二一号一番）。他寺僧が理性院流嫡流の相承において果たした役割は注目すべきものであろう。

また「横入」や「交衆」に関する寺院法は、南北朝時代以降の醍醐寺においてしばしば制定されたが、その強制力はそれほど無く柔軟であったようにみえる。そのため文永寺僧や長典をはじめとする他寺僧が広く

受容されたといえる。

応仁文明の乱以後の混乱した状況の中で、醍醐寺僧が地方に下り多くの地方住僧に付法を行い、教線を拡大したことがこれまで注目されてきたが、その一方で醍醐寺に訪れる他寺僧をも広く受容したことについても今後さらに解明していく必要がある。

# 【注】

- (1) 黒田俊雄編『寺院法』第二編 真言 真一〇、担当 久野修義氏、集英社、二〇一五年。
- (2) 注(1) 前掲書「第二編 真言」真三一、担当 馬場綾子氏。
- (3) 醍醐寺には守覚親王を始めとして、古来より修学のため多くの他寺僧が訪れたが、それらは伝授のための一時的なものであり、醍醐寺住僧になつたわけではないと考え、「横入」とは区別することにした。
- (4) 応永元年（一三九四）「廿一方評定引付」（『東寺百合文書』）ち函。
- (5) 注(1) 前掲書「第二編 真言」真三三、担当 馬場綾子氏。
- (6) 注(1) 前掲書には、「横入」に関連して「交衆」の記述が「第二編 真言」真二九、真三六にみえる。
- (7) 永村眞氏「頼瑠法印と醍醐寺」（『智山学報』五二、二〇〇三年）。
- (8) 『真言宗全書』三十七。
- (9) 大伝法院が高野山から根来寺へ移った経緯や時期については、中川委紀子氏「根来寺を解く―密教文化伝承の実像―」（朝日新聞社出版、二〇一四年）を参照。
- (10) 報恩院と無量寿院の院主を兼帯した澄恵以降、各々の院主は地方に下向し、地方住僧に対して授法を行った。詳しくは拙稿「醍醐寺僧と地方住僧」（『中世醍醐寺と真言密教』、勉誠出版、二〇〇八年）。
- (11) 宇都宮慈心院住僧は、明応七年（一四九八）に俊聖が無量寿院澄恵から印可を受けて門弟となつて以来、代々無量寿院との間に本末関係を結んだ。そのため、後には「田舎本寺」としての役割を果たしたとみられる（注(10) 前掲拙稿参照）。
- (12) 「文永寺安養寺由緒寛書」文永寺所蔵。

- (13) 下久堅小学校歴史研究会編『文永寺史』、一九三七年、山村書院。
- (14) 市村威人氏「文永寺の女房奉書」(『市村威人全集』第八卷、一九八〇年、下伊那教育委員会)。
- (15) 井原今朝男氏「民衆統合儀礼としての太元帥法」(『中世寺院と民衆』、臨川書店、二〇〇四年)。
- (16) 喬木村歴史民俗資料館所蔵。
- (17) 拙稿「権僧正勝覚による三寶院創始とその付法」(『研究紀要』、醍醐寺文化財研究所、二〇一五年)。
- (18) 永村眞氏「修法と聖教―太元帥法を通して―」(皆川完一編『古代中世史 科学研究』下巻、吉川弘文館、一九九八年)。
- (19) 『歴代殘闕日記』第十八卷 所収。
- (20) 「出世者」の意味については以前に、拙稿「室町時代における三寶院門跡の実態」において言及したので参照していただきたい(前掲書『中世醍醐寺と真言密教』)。その他、「出世者」については、中世については鈴木智恵子氏「出世者・世間者」考―醍醐寺僧の場合―(『研究紀要』、醍醐寺文化財研究所、三号、一九八一年)、近世については風間弘盛氏「近世初頭の醍醐寺にみられる出世について」(『密教学研究』三六号、二〇〇四年)、同「醍醐寺にみられる出世について―学侶取立事例から分かる出世・学侶・平民・寺僧の呼称―」(『豊山教学大会紀要』三四号、二〇〇六年)があるが、いまだ「出世者」の意味についての定説はないように思える。
- (21) 拙稿「醍醐寺と地方住僧」(前掲書『中世醍醐寺と真言密教』)。
- (22) 宗典の出自については『新要録』理性院篇に掲載の院主次第や「理性院流血脈次第」(『醍醐』八三函二三号)にも記されておらず、不明である。しかし報恩院と無量寿院を兼帯した澄恵が「平民」と記され、その出自は河内守大江親重の息であることを考慮すると(『五八代記』澄恵項)、おそらく宗典も同様の出自であると推測されよう。
- (23) 『信濃史料』九、『醍醐』八一函九二号。
- (24) 『信濃史料』九、『醍醐』八一函九二号。
- (25) 『信濃史料』九、『醍醐』八一函九二号。
- (26) 何故、宗典から宗詢に対して、時代において三度もほぼ同内容の附法状が与えられ、それらが書継の形をもって醍醐寺に残されたのかである

が、附法状とは本末関係の確認であることから、文永寺がただの地方末寺ではなく、文永寺宗詢が法流の嫡流を相承する重要な人物であることを確認するためであったと考えられる。

- (27) 大谷由香氏「史料紹介 智積院新文庫所蔵『視覃雜記』について」(『智山学報』六〇、二〇一二年)。
- (28) 西谷功氏「視覃雜記」著者「長典」と醍醐寺建久本『十卷抄』所持者長典―中世後期における「兼学僧」の一実態―(『智山学報』六四、二〇一五年)。
- (29) 「本寺」の定義については、永村眞「真言宗」と東大寺―鎌倉後期の本末相論を通して―(『中世寺院史の研究』下、法蔵館、一九八八年)に詳しい。
- (30) 権僧正義堯置文案(『大日本古文書 家わけ十九 醍醐寺文書』七一―一四四二、『醍醐』一一函六九号)。
- (31) この翌月である永正十四年四月廿二日に宗典は九十二歳で入滅している(『醍醐』八十三函二十三号)。
- (32) 注(30) 前掲史料。
- (33) 注(28) 前掲西谷氏論文。
- (34) 富田正弘氏「中世東寺の寺院組織と文書授受の構造」(『資料館紀要』八、一九八〇年)。
- (35) 永正十二年(一一五五)に長典書写の明応二年伝法灌頂見聞記(『醍醐』四九七函十号)の奥書にも「五智院権僧正宗典 弟子長典」がみえる。
- (36) 同日の印信印明案が「醍醐」七九号一七九号にある。
- (37) 高嶋阿弥陀寺の詳細は不明であるが、明応六年五月十六日長典の師である五智院宗典は阿弥陀寺に下っている(『宗典僧正記』)。
- 〔付記〕 本稿は、二〇一五年度東京大学史料編纂所 一般共同研究「醍醐寺文書聖教における泉涌寺関係史料の基礎的研究」による研究成果の一部である。本研究の共同研究者であった高橋慎一朗氏(東京大学史料編纂所)、大谷由香氏(日本学術振興会特別研究員)、西谷功氏(泉涌寺心照殿学芸員)からは貴重な研究の場を与えていただいた。また史料の閲覧・掲載に際しては、醍醐寺当局に多大なるご高配を賜った。心より感謝申し上げます。